

慶応4年野州世直し一揆の再検討

長谷川伸三

はじめに

第1節 東上州世直し一揆の波及

第2節 宇都宮周辺の世直し一揆

第3節 真岡・芳賀地方の世直し一揆

第4節 鹿沼周辺の世直し一揆と村方騒動

第5節 多功宿の騒動と下津原村の世直し一揆

むすび

はじめに

私が1974年に発表した「慶応期野州中央部の農民闘争」（以下前稿とよぶ）は、栃木県史編纂事業にかかわるなかで作成した3編の論文（いずれも史料紹介的研究ノートであるが）を集成し、改稿したものである¹⁾。前稿の発表以前には、慶応4年（1868）の下野国世直し一揆に関しては、断片的な事例は多少明らかにされていたものの、総体的な把握が立遅れていたのである。その後、幕末維新时期に関する研究論文や概説書のなかで、野州の世直し一揆を視野にいられた仕事が増加したことは、大変結構なことと思われる。

ところで栃木県史編纂事業は、私が調査員を辞任した後に史料編の刊行が順

原稿受領日 1982年9月10日

1) 前稿は大町雅美・長谷川伸三編著『幕末の農民一揆——変革期野州農民の闘い——』

（雄山閣、1974年）の第3章である。その前提となった3編の論文は次の通り。

「慶応四年春の野州打ちこわしをめぐる」（『栃木県史研究』第1号、1971年）。

「幕末・維新时期北関東の農民一揆——慶応四年東上州・野州打ちこわしを中心に——」（『地方史研究』第110号、1971年）。

「幕末・維新时期野州における農民闘争——慶応2～4年を中心に——」（『栃木史論』第9・10合併号、1972年）。

調に進み、とくに『栃木県史・史料編』近世7(1978年刊)は、8ポイント活字2段組970ページに幕末維新の関連史料を体系的に収載し、ことに第2章「世直し」は、290ページにわたって野州各地域の世直し一揆と幕末・明治初年の農民闘争の史料を集成している。ここに収められた史料のうち5分の1程は、前稿執筆時までに一応検討したものであるが、その他の私にとっての新史料を含めて検討し、前稿を書き改める必要を痛感していた。本稿はこの書き改めのための一つの基礎作業である。ここでは慶応4年4月の野州各地域の世直し一揆とそれに関連する村方騒動に限定して、前稿で触れられなかった事例と、新史料の出現により大幅な修正を必要とする事例を中心に検討を加えることにした。

なお前稿に関しては、菅野則子氏からの的確な書評を寄せられている²⁾。また長倉保氏から野州中央部の内乱期の農民闘争を、翌年(明治2年)の塩谷・那須地域の農民騒動に延長させて位置づけることの非を指摘されている³⁾。これ等の批判に実証的分析をふまえて答えていくには自己の怠慢を痛感するが、今回はほとんど見送らざるをえなかった。

また幕末維新期の野州の農民闘争に関して、近年の労作として、上杉允彦「幕末期野州農村の動向——安足地域を中心として——」(『栃木県史研究』第18号、1979年)と深谷克己「世直しと御一新——下野における戊辰情勢——」(鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』第1巻、日本評論社、1982年)がある。前者は野州のなかでも商品生産の展開度が高いとみられる足利・梁田・安蘇郡を対象に、天明期以後、幕末にかけての農民闘争の展開を分析している。この地域は小藩・旗本の相給支配が特徴的であるが、このことが広範な農民の村政参加と支配関係をこえた農民の結合を可能にしたこと、この地域の織物業を中心とする商品生産の発展と農民層分解は必ずしも高くはなく、従って半プロ層が主体となる幕末の世直し一揆の全面的激発には至らなかったこ

2) 菅野則子「書評 大野雅美・長谷川伸三編著『幕末の農民一揆』 植田敏雄編『茨城百姓一揆』」(『歴史学研究』第421号、1975年)。

3) 長倉保「明治初年塩那地域における農民騒動関係史料・解説」(『栃木県史研究』第9号、1975年)。

と、しかし、安政開港以降、火札・張札騒動、村方騒動、対領主闘争等の世直し一揆的闘争が継起し、農民が世直し一揆にかわりうる成果を獲得していることが明らかにされている。

後者は『栃木県史・史料編』近世7、所収の世直し一揆・村方騒動関係の史料を充分に使って、世直しの運動自体に即した把握を試みたものである。世直しの表現、世直しの目標等を確定し、ついで世直しの対抗関係と頭取、世直し型とそれ以外の村方騒動、有徳者・村役人層の対応等の側面が分析され、さらに旧支配機構の崩壊と御一新政治の開始による世直し主体の解体を明らかにしており、示唆に富む論文である。

野州農村の分析としては、須永昭「天保期の農村——商品生産と分業関係の編成——」(青木美智男・山田忠雄編『講座日本近世史6・天保期の政治と社会』有斐閣, 1981年)が有用である。ここでは木材生産地帯、麻特産地、足利織物業、主雑穀生産地帯を例に商品生産と分業関係の特質を明らかにし、ついで天保期における分業関係の発展と矛盾の激化のなかで、小生産者農民の生産力水準の形成と農民層内部における剰余分配の抗争の激化が「世直し状況」の前提を形成するという論点が提示されている。この論旨は説得力のあるものであり、天保期～幕末期の野州農村の構造的把握を前進させるものと思われる。

第1節 東上州世直し一揆の波及

慶応4年(1868)3月12日例幣使街道木崎宿(上野国新田郡)附近に発生した世直し一揆は銅山街道を北上し、大原本町をへて大間々町(上野国山田郡)に入り町名主高草木家等を打ちこわした。以後一揆勢の一部は西に進み、赤城山南麓一帯の勢多郡東部農村に世直し一揆を展開し、館林藩兵の出動でようやく鎮圧されている。一方大間々町を打ちこわした一揆勢の多くは桐生新町に向い、14日桐生の町内と近郊の豪商に押しかけて多額の施し金を要求し、一部の豪商を打ちこわし、さらに下野国足利町に向けて進撃しようとした⁴⁾。

4) 拙著『近世農村構造の史的分析——幕藩体制解体期の関東農村と在郷町——』(柏書房, 1981年)第9章「幕末・維新时期東上州の世直し一揆」。

次の史料小俣村木村家文書「雑記」は、一揆勢が桐生新町と足利町のほぼ中間の小俣宿（下野国足利郡）において、足利藩兵と衝突する様子を伝えている⁵⁾。

慶応四戊辰年三月初旬、上武野州宿々在々百姓一揆蜂起、処々物持等打毀し、三月十四日桐生町へ一揆押来、凡七八百人余森宗・佐羽清打毀、佐羽吉は聊見せへ手ヲ付毀し、夫より新宿村江原貞助大打毀し、境野より小俣へ押来打毀等ハ無之、出金・施米・質物等之示談ニて相済、先勢百人計小俣へ押来示談中之処へ、不計も足利御陣屋ヨリ鎮撫方御人数先手組三十人計出陣、村内ニおゐて一揆ニ出会直々放炮、炮声ニ驚恐怖、一揆速々散乱退去、賊党方即死二人、手負ハ七八人之よし、生捕六人、鎮撫方は一切手負等無之候、右故一先鎮静ニ相成候

一揆勢は小俣宿で出金・施米・質物返還等を村役人や豪農に交渉中に、足利藩兵の銃砲による攻撃にあい退散したのである。足利藩兵にはこの年正月頃に結成された農兵誠心隊も加わっており、慶応2年（1866）6月の武州一揆と同様に、農民の一揆を農民の兵士が弾圧する図式が再現している。なお足利藩の農兵は、藩士総数134名という小藩の国元の秩序を守ることを目的に、足利町の町役人等を伍長（幹部）にし、主に上層の町民・農民の子弟を組織したものであり、豪農商層の自衛部隊としての性格が濃かった⁶⁾。またこの事件の直後、小俣宿では名主で豪農の大川家の提唱により、郷兵の取立てに着手し、村内の足利藩領と旗本領を含めて19名の郷兵が成立している。7月には郷兵による近辺見廻りも開始され、治安維持に効果をあげている⁷⁾。

ところで小俣宿を退散した一揆勢は、なおも世直しをあきらめずに、14日夕刻桐生の西方仁田山にたてこもって再結集をはかったが、草莽黒田桃民（新田満次郎の尊王隊所属）の率いる小隊に攻撃されている。一揆勢の一部は桐生川沿いに北上し、小友村・下菱村・上菱村（下野国足利郡、現在は桐生市）に侵

5) 栃木県史編さん委員会編『栃木県史・史料編』近世5（1979年）257ページ。

6) 足利市史編さん委員会編『近代足利市史』第1巻（1977年）913-917ページ。

7) 慶応4年3月「拙心記 大川昌信」（前掲『栃木県史・史料編』近世5、254-257ページ）。

入している。こうして東上州の世直し一揆は14、15日には終息したが、16日頃から下菱・小友両村や桐生の南方の下広沢村（上野国山田郡）では、村内の村役人や質屋・豪農に金穀の抛出や質物証文の返還を求める村方騒動が発生し、4月上旬まで動揺が続いている⁸⁾。また3月28日には、小俣宿組合村13カ村（小俣宿とその周辺村々、小友・下菱・上菱村も含まれる）で、小前惣代が組合村内の33軒の質屋を小俣宿寄場に呼出し、質金利息の引下げを要求している。質屋側も世直し一揆の再発を恐れて農民の要求を受入れている⁹⁾。

以上のように、東上州世直し一揆の波及は3月14日小俣宿でたち切られたけれども、その情報は野州各地に急速に広まり、約半月後に宇都宮・鹿沼・真岡周辺の世直し一揆を誘発するのである。

第2節 宇都宮周辺の世直し一揆

宇都宮・鹿沼周辺の世直し一揆に関しては前稿で詳述したが¹⁰⁾、ここでは『栃木県史・史料編』近世7（1978年）に収められた関係史料に若干の他の史料を加えて、打ちこわされた家を主に、ほぼ日時順に一覧表（表1）にしてみた。なるべく2点以上の史料に共通する記述を採用するようにしたが、一部に史料相互間の記述に相違があり、同じ家の名前と屋号等を別々に載せているかもしれない。また史料の関係から氏家宿とその周辺の打ちこわしの状況は充分に把握できなかった。鹿沼南方の打ちこわしについても省略した。以下前稿の記述と一覧表を補足していきたい。

まずよく引用される史料「百姓騒動根本記」は¹¹⁾、一揆発生後6カ月たってから物語風にまとめられたものであるが、他のより直接的な史料（御用留・日記・届け書等）と比較してみても、その記述は事実をかなり忠実に反映したものとみなせる。ただし、記述の対象がほぼ宇都宮周辺に限定されている点はや

8) 前掲『近世農村構造の史的分析』285-287、290-291ページ。

9) 前掲『近代足利市史』第1巻、889-890ページ。

10) 拙稿「慶応期野州中央部の農民闘争」（大町雅美・長谷川伸三編著『幕末の農民一揆』所収、雄山閣、1974年）。

11) 栃木県史編さん委員会編『栃木県史・史料編』近世7（1978年）410-413ページ。

表1. 宇都宮周辺で打ちこわされたり、降参した家

| 日 附 | 宿・村 (郡) | 襲撃された家 | 被害状況 |
|---------------------------------|-------------|---------------|--------|
| 3月29日 | 安塚村 (都賀郡) | 酒屋 | 打毀し |
| | 石橋宿 (都賀郡) | 問屋 義十郎 | 打毀し |
| | 雀宮宿 (河内郡) | 問屋初め 4~5 軒 | 打毀し |
| 4月1日 | 桑島村 (河内郡) | 日野屋 (質屋・酒造) | 押込み・降参 |
| 4月1日 | 石井村 (河内郡) | 柳原五郎右衛門 (白子屋) | 焚出し |
| | 石井村 (河内郡) | 近江屋 (質屋・酒造) | 押込み |
| | 汗 村 (河内郡) | 久 六 (物持) | 押掛け |
| 4月2日 | 柳林村 (芳賀郡) | 藏之助 | 押掛け・降参 |
| 4月2日 | 屋板村 (河内郡) | 政之助 | 打毀し |
| 4月2日 | 西川田村 (河内郡) | 青木周藏 (郷村取締) | 打毀し |
| 4月3日、鶴田村 (河内郡) に 5,000 人余が結集。 | | | |
| 4月3日 | 築瀬村 (河内郡) | 増淵操作 | 降 参 |
| 4月3日 | 築瀬村 (河内郡) | 築瀬権兵衛 (郷村取締) | 打毀し |
| | 荒針村 (河内郡) | 坂印助郷取締 | 打毀し |
| | 上荒針村 (河内郡) | 俊三郎 (大惣代名主) | 打毀し |
| | 上荒針村 (河内郡) | 定右衛門 | 打毀し |
| | 寺内村 (河内郡) | 名主勘右衛門 (酒造) | 打毀し |
| | 上戸祭村 (河内郡) | 勘右衛門 (名主・酒造) | 打毀し |
| | 下戸祭村 (河内郡) | 大淵佐左衛門 (名主) | 打毀し |
| 4月3日夜、宇都宮町八幡山に 3 万人余が結集。 | | | |
| 4月3日 | 宇都宮城下 (河内郡) | 杉原町 5~6 軒 | 打毀し |
| | 岩曾村 (河内郡) | 半田家か | 焚出し |
| 4月3日 | 上田原村 (河内郡) | 渡辺良介 (名主・酒造) | 打毀し |
| | 白沢宿 (河内郡) | 問屋 3 軒 | 打毀し |
| | 白沢宿 (河内郡) | 本陣宇加地太郎左衛門 | 打毀し |
| | 白沢宿 (河内郡) | 継立世話役 (馬差) | 打毀し |
| | 桜野村 (塩谷郡) | 滝沢喜兵衛 (紙屋) | 打毀しか |
| 4月4日 | 大宮村 (塩谷郡) | 漆原七郎右衛門 | 打毀し |
| 4月4日 | 道下村 (塩谷郡) | 酒造屋他 | 焚出し |
| 4月4日 | 玉生村 (塩谷郡) | 玉生七郎左衛門 (酒造) | 打毀し |
| | 肘内村 (塩谷郡) | 杉山誠三郎 | 押掛け |
| 以上塩谷郡侵入勢は肘内村で終息、以下に徳次郎・鹿沼方面を示す。 | | | |
| | 今里村 (河内郡) | 笹沼家 (名主・酒造) | 打毀し |
| | 今里村 (河内郡) | 長左衛門 | 打毀し |
| | 上横倉村 (河内郡) | 源次 (問屋立会役人) | 打毀し |
| | 下徳次郎村 (河内郡) | 長屋雅楽之助 (脇本陣) | 打毀し |
| | 中徳次郎村 (河内郡) | 米沢屋亀次郎 | 打毀し |

| 日 附 | 宿・村・(郡) | 襲撃された家 | 被害状況 |
|-------|---------------------|-------------|--------|
| | 中徳次郎村(河内郡) | 間屋・本陣 | 打毀し |
| | 中徳次郎村(河内郡) | 酒屋・物持 | 降参 |
| | 上徳次郎村(河内郡) | 大塚屋栄介 | 打毀し |
| | 砥上村か(河内郡) | 1軒 | 打毀し |
| | 門前村 | 次五右衛門 | 打毀し |
| | 新里村(河内郡) | アクト(酒造・質屋) | 打毀し |
| | 新里村(河内郡) | タクミヤオジ(内匠内) | 打毀し |
| | 新里村(河内郡) | 外1軒(定司か茂司) | 打毀し |
| | 岩原村(河内郡) | 高橋新蔵(名主) | 打毀し |
| | 古賀志村(河内郡) | 北条文太夫 | 打毀し |
| | 武子村(都賀郡) | 2軒 | 打毀し |
| 4月5日頃 | 鹿沼宿御成橋で一揆勢と宇都宮藩兵衝突。 | | |
| 4月5日 | 文挾宿(都賀郡) | 間屋善左衛門 | 打毀し |
| 4月5日 | 板荷村(都賀郡) | 梶屋富久田伊左衛門 | 逗留・焚出し |

〔注〕 ほぼ日附順に並べたが、空白は日附を確定できないことを示す。郡名を記さない村名は村内の字と思われる。

〔史料〕 慶応4年4月「茂呂村御用留・別手東組聞書」、明治元年10月「百姓騒動根本記」、慶応4年4月「下岡本村打毀騒動日記」、同4年4月「給部村綱川家あて世直し騒動風聞書」、同4年4月「亀山村名主日記」、以上『栃木県史・史料編』近世7(1978年)324-325, 410-416, 419-424ページ。慶応4年4月「世中百姓騒ぎ付相破候連名帳」『宇都宮市史』第4巻、近世史料編II(1981年)733-735ページ。塩谷町道下、柿沼家文書、慶応4年4月「打毀し騒動留書」。

むをえない。これに対して、松井郡平「宇都宮誌・維新前後百姓一揆」(『下野新聞』連載、1924年)は近代に入ってから先駆的な叙述であり、世直し一揆の具体的な状況について興味深い記述が多い。しかし、一揆が鹿沼宿に発し、氏家宿・雀宮宿等に波及したのち、4月8日夕刻に宇都宮の八幡山に結集し、宇都宮藩兵と衝突したとしており、一揆勢のコースや打ちこわしの日附が事実とは相当喰違っており、取扱いに注意する必要がある。

次に一揆の発端の日附と場所について、前稿では「4月2日頃に宇都宮と壬生との中間、娑川の河岸がある幕田村・安塚村辺に発生したものである」と記したが¹²⁾、「塩山村小林家日記」には、「(三月)廿九日、打コハシ安塚より発る由」、「晦日(三十日)、打コハシニ付、石川三郎左衛門殿より楡木宿へ加勢

12) 前掲拙稿論文、157ページ。

頼ニ来ル由」とあり¹³⁾、打ちこわしが3月29日に安塚村(日光御成道)に発生し、翌30日に楡木宿(例幣使街道)辺に波及したことが明らかである。また「畠山領訴状留」に収められている慶応4年3月日付、小林村名主忠兵衛より御陣屋御役所あての届け書には、「隣村安塚村大日山と申へ、何者ニ候哉六七拾人籠居、右之者共之内拾五六人、村方へ今曉方罷越、軒別老人ヅム人足可差出、若延引候ハム、片端より打破候旨、棒鎗等ヲ携、大音ニ匄り乱妨ニ付、無拋面々家別老人ヅム今日罷出候趣、只今注進有之候」とあり¹⁴⁾、この届け書が3月26日付の願書に続いて記されていることから、事件が3月末に発生したことが明らかである。

一方石橋宿(日光街道)の打ちこわしが発端とみることも可能である。たとえば「茂呂村御用留・別手東組聞書」の冒頭に、「抑最初は人馬継立賃せん割渡し方之義ニ付、宿々問屋・年寄・立会人等横領之廉有之由ニて、石はし助郷より発り、石橋宿問屋義十郎、雀宮宿其辺在々重役家、又は福家等悉破却いたし」とあり¹⁵⁾、当初は助郷賃銭の割渡しに関する不正を追及して、周辺農民が石橋宿問屋を襲撃したことが発端であるとし、安塚村の打ちこわしには言及していない。また以上引用したどの史料も、幕田村の農民の動きには触れていない。

一揆勢は4月1日(3月30日の翌日)から2日にかけて、宇都宮東郊、鬼怒川西岸の桑島・石井両村をへて、宇都宮南郊の西川田・築瀬両村の郷村取締り役を打ちこわし、鶴田村に結集している。この間、鬼怒川沿岸では南方^{よぎかし}の汗村や東岸(芳賀郡)^{こてやま}の鑑山村・柳林村に一揆が波及しており、4月4日芳賀郡真岡町に発生する世直し一揆との関連性が推測されるが、まだ具体的な様相は明らかにできない。また鶴田村に結集した農民5,000余人は、ここで要求内容や実現方法を調整し、当初の郷村取締り役・宿問屋襲撃の他に、諸物価の引下げと質物の取戻し、富家による金穀の拋出などの要求を加えたが¹⁶⁾、組織化の内容や程度の詳細は不明である。ただその後一揆勢が宇都宮西郊・東郊で展開し

13) 前掲『栃木県史・史料編』近世7, 320 ページ。

14) 同上書, 357-358 ページ。

15) 同上書, 324 ページ。

16) 「百姓騒動根本記」(同上書, 411 ページ)。

た行動に、上記の方針や組織性がうかがえる。

4月3日夜宇都宮八幡山に結集した一揆勢3万人余は、宇都宮城附近で藩兵と衝突して退散し、以後一揆勢は北上して奥州街道白沢宿の打ちこわし後、二手に別れている。一手は鬼怒川をこえて奥州街道氏家宿と隣りの桜野村に侵入し、さらに4日塩谷郡大宮村・玉生村^{たまにゆう}を打ちこわした後、反転して同郡肘内村^{ひじうち}で宇都宮藩兵の鎮圧にあい、四散している。氏家宿の打ちこわしの状況は不明だが、4月10日には芳賀郡から世直し一揆が波及し、氏家宿等で5軒の商人が打ちこわされている(後述)。また塩谷郡での農民の結集は、4月17日に大槻村・鷲宿村、同23日に上平河岸と継起している¹⁷⁾。

他の一手(一揆勢の主流)は、鬼怒川の西岸を北上して小倉・今里村辺で方向を西南に転じ、日光街道徳次郎宿^{とくじら}を襲い、さらに新里^{につさと}・岩原^{いわはら}・古賀志村^{こがし}をへて鹿沼宿に向い、鹿沼宿北端の御成橋で宇都宮藩兵による鎮圧にあっている。なお宇都宮藩兵は宇都宮城下でもこの鹿沼でも、一揆勢に容赦なく発砲している。御成橋で銃撃された一揆勢は、例幣使街道を北上して日光神領文挾宿^{ふばさみ}を襲い、さらに板橋宿に向うが日光神領役人の阻止にあい、文挾宿西方の板荷村^{いたが}に結集後解散している。

以上みてきたように宇都宮周辺の村々は、ほぼ軒並に一揆勢への参加か、その拒否による襲撃かを迫られたのである。なかには「上横倉村ニて問屋立会人(注一源次)至て貧民ニ候得共、横領可有之と疑心相懸ケ打破し、中徳二郎壱軒(注一大塚屋栄介か)、下徳二郎宿脇本陣雅楽之助宅散々ニ打破し、依て三人狂乱いたし、左有ハ是より発足致他家打破可申と声懸」という悲喜劇も発生している。この下徳次郎宿の雅楽之助は、鹿沼宿御成橋で宇都宮藩兵の銃撃にあたり、帰宅後死亡している。また一揆勢は「岩原村ニ至候所、人足遅滞いたし候過怠ヲ以、無咎名主(注一高橋新蔵)壱軒能々打破」とするという事態も発生している¹⁸⁾。

一揆勢への対応の遅れや誤解によっても打ちこわされる危険が多いとあって

17) 前掲拙稿論文、167-168 ページ。

18) 「茂呂村御用留・別手束組聞書」(前掲『栃木県史・史料編』近世7、324 ページ)。

は、近在の豪農層は恐れおののかざるをえなかった。それだけに彼等は一揆勢が自村に向うかどうか、また近村でどのような事態が起っているかについて、必死に正確な情報を集めようとした。たとえば河内郡下岡本村の五月女家は、配下の農民を毎日のように宇都宮周辺に派遣し、時には彼等を一揆勢のなかに入り込ませて、その動向を探らせ、記録している¹⁹⁾。豪農層や村役人のこうした一揆情報の収集・交換活動が、この世直し一揆に関する生々しい記録（日記・覚え書・書簡・届け書等）を多数残してくれたともいえよう。

ところで宇都宮周辺の世直し一揆は、一揆に参加した農民にどのような成果をもたらしただろうか。まず一揆の発端ともなった過重な助郷人馬役の軽減の要求は、一揆終息後間もなく当地方を襲った戊辰戦争のため、実現するどころか旧に倍する助郷人馬役の割当てで消しとんでしまった。助郷賃金の割渡しに関する不正問題の追及も成果をあげたか疑問である。一方物価引下げの要求については、宇都宮藩は一揆の鎮静化をはかるために、銭100文に付油2合、上酒3合、中酒5合、白米3合、質利息1両に付銭100文等の値下げ令を出したので、要求はほぼ貫徹したとみられる。また鹿沼の質屋福田家は、4月22～24日に質物を無償で返却しており²⁰⁾、質物の無償返還の要求もひとまず成果があったといえよう。

第3節 真岡・芳賀地方の世直し一揆

真岡・芳賀地方の世直し一揆についても前稿で概観したので²¹⁾、ここでは一揆勢の進路を整理してみよう。まず4月4日夜に真岡三町に激しい打ちこわしが勃発し、質屋・穀屋・木綿問屋・晒し屋・町役人等18軒が打ちこわされた。真岡陣屋（代官所）も一揆勢の攻撃対象となり、代官山内源七郎とその配下は逃走し、真岡と同代官所領は一時権力不在の状態となった。その後一揆は東方と北方の村々に波及した。東方では、5日朝から長堤・上山・前沢各村に打ち

19) 「下岡本村打毀騒動日記」(同上書, 413-414 ページ)。

20) 「鹿沼福田家風聞異説日記」(同上書, 325-326 ページ)。

21) 前掲拙稿論文, 175-194 ページ。なお同上論文177 ページ「稲毛田細川家文書」を「給部綱川家文書」に, 179 ページ「稲毛田村細川太郎左衛門」を「給部村綱川太郎左衛門」に訂正する。158, 161, 180-181 ページの同じ語句も同様に訂正する。

こわしが発生し、一揆勢は山本村に侵入し、さらに6日西田井・鶴田両村から益子町北方の七井村へ向う動きもあった。ただし、私は現在のところ真岡より東方に波及した一揆については適切な史料を見出してはいない。

北方では、5日西郷・飯貝・西高橋・東高橋・氷室等の各村に打ちこわしが広まり、一揆勢は6日には東水沼・祖母井・下高根沢村、7日には上延生・ハツ木村等の芳賀郡北端の村々や塩谷郡栗ヶ島・太田村等を打ちこわしている。6日の祖母井村襲撃以後、一揆勢に金穀の抛出を誓約して打ちこわしを免れる「降参」の事例が目立ってくる。4月7・8日芳賀・塩谷両郡の境界の村々では、「降参」の軒数が打ちこわされる軒数を上回るほどになる。こうして8日泉村（高根沢郷）の打ちこわしで、5日間にわたる真岡・芳賀地方世直し一揆はひとまず終息したものと思われる。なおこの間に、真岡の西方亀山村では村内の豪農と小前が対立し、小前側に立った一名主の主導で、質地・質物の取戻しと金穀の抛出が取決められている²²⁾。

真岡・芳賀地方の世直し一揆のなかで、打ちこわされたり、降参した家をほぼ日時順に一覧表(表2)にしてみた。依拠した史料の関係で真岡東方の村々の状況が不明であるが、約70軒をかかげることができた。依拠した史料相互間の記述に精粗・相違があるので、なるべく2点以上の史料に共通する記述を採用するようにした。しかし、6日の祖母井村とそれ以後の村々に関しては、史料相互間の記述の相違が大きいために調整しきれず、一史料にのみ出ているものもかかげることになった。従って打ちこわしにあったものは祖母井村では8軒、上延生村では3軒という史料の記述²³⁾を生かせば、祖母井・上延生両村とも同一家の名前と屋号を別々にかかげたおそれがある。以下一覧表について若干のコメントをつけておきたい。

真岡町以外の村々で一揆勢の攻撃対象となった家は、その大部分が豪農で、酒造業・質屋・金融業を兼ね、名主等の村役人であるとみなしてよい。たとえ

22) 秋本典夫著『北関東下野における封建権力と民衆』(山川出版社、1981年)第2篇第1章第2節「幕末期における農民闘争の構造」参照。

23) 「亀山村名主日記」(前掲『栃木県史・史料編』近世7、420ページ)、「上延生村御届帳控」(同上書、426-431ページ)。

表2. 真岡・芳賀地方で打ちこわされたり、降参した家

| 日 附 | 町・村 (郡) | 襲撃された家 | 被害状況 |
|------|---------|-------------|---------|
| 4月4日 | 真岡荒町 | 鈴木久四郎 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡荒町 | 戌亥屋 | 打毀し、大荒 |
| 4月4日 | 真岡荒町 | 満川祐春 | 打毀し、大荒 |
| 4月4日 | 真岡荒町 | 助兵衛 | 打毀し、大荒 |
| 4月4日 | 真岡荒町 | 土蔵兵右衛門 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡荒町 | 仲間福田屋 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡荒町 | 嶋 屋 | 打毀し、不入 |
| 4月4日 | 真 岡 | 佐の屋 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡台町 | 半兵衛 | 打毀し、大荒 |
| 4月4日 | 真岡台町 | 晒 屋 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡台町 | 定 吉 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡田町 | 藤岡屋常兵衛 | 打毀し、大荒 |
| 4月4日 | 真岡田町 | 豊田利兵衛 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡田町 | 福井屋周助 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡田町 | 金木屋 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡田町 | 田町新田穀屋 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡田町 | 堺屋善兵衛 | 打毀し |
| 4月4日 | 真岡田町 | 材木屋喜兵衛 | 打毀し |
| | 西郷村 | 藤右衛門 | 打毀し、大荒 |
| | 堀内村 | 下屋一 | 打毀し |
| | 飯貝村 | 武兵衛 | 打毀し |
| | 西高橋村 | 〔4軒程〕 | 打毀し |
| 4月5日 | 東高橋村 | 前田重蔵 | 打毀し |
| 4月5日 | 氷室村 | 氷室新右衛門 | 打毀し |
| 4月5日 | 長堤村 | 茂 助 | 打毀し |
| 4月5日 | 長堤村 | 紋右衛門 | 打毀し |
| 4月5日 | 長堤村 | 佐 七 | 打毀し |
| 4月5日 | 長堤村 | 袖之助 | 打毀し |
| 4月5日 | 上山村 | 仙右衛門 | 打毀し |
| 4月5日 | 前沢村 | 兵左衛門 | 打毀し |
| 4月6日 | 龜山村 | 和田柳 | 打毀し途中内済 |
| 4月6日 | 東水沼村 | 西川惣兵衛 | 打毀し |
| 4月6日 | 東水沼村 | 忠兵衛 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 町田久右衛門 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 〔仙助〕 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 〔太兵衛〕 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 横堀孫右衛門 (万屋) | 打毀し |

| 日 附 | 町・村 (郡) | 襲撃された家 | 被害状況 |
|-------|-------------|-------------|--------|
| 4月6日 | 祖母井村 | 杉田勘右衛門 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 〔新兵衛〕 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 〔茂右衛門〕 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 天満屋利右衛門 | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 宮川屋 (新宅・本宅) | 打毀し |
| 4月6日 | 祖母井村 | 〔糸屋半兵衛〕 | 降 参 |
| 4月6日 | 祖母井村 | 〔奥州屋仙次〕 | 降 参 |
| 4月6日 | 祖母井村 | 〔油屋久兵衛〕 | 打毀し |
| 4月6日 | 下高根沢村 | 斎藤十内 (高田) | 打毀し |
| 4月7日 | 上延生村 | 塩田惣右衛門 | 打毀し |
| 4月7日 | 上延生村 | 〔車屋本宅・新宅〕 | 打毀し |
| 4月7日 | 上延生村 | 定右衛門 (紺屋) | 打毀し |
| 4月7日 | 上延生村 | 周 助 | 打毀し |
| | 大 島 | 〔紺屋〕 | 打毀し |
| | 迎 戸 | 阿久津半之助 | 降 参 |
| | 迎 戸 | 日野屋 | 降 参 |
| | 西 根 (塩谷郡) | 宇津権右衛門 | 降 参 |
| | 西 根 (塩谷郡) | 辰巳屋 | 降 参 |
| | 般若塚 (塩谷郡) | 黒崎治部右衛門 | 降 参 |
| | 般若塚 (塩谷郡) | 天満屋 | 降 参 |
| | 八ツ木村 | 小堀庄兵衛 | 打毀し |
| | 栗ヶ嶋村 (塩谷郡) | 矢野九平 | 打毀し |
| | 太田村 (塩谷郡) | 見目清左衛門 | 打毀し |
| | 太田村 (塩谷郡) | 久右衛門 | 打毀し |
| 4月7日 | 給部村 | 綱川源次右衛門 | 降 参 |
| | 中柏崎村 (塩谷郡) | 矢口長右衛門 | 降 参 |
| | 梶 内 (下高根沢村) | 螺良源右衛門 | 降 参 |
| | 日下田 | 黒崎太左衛門 | 降参か打毀し |
| 4月8日 | 泉 (高根沢郷) | 八兵衛 | 降参か打毀し |
| | 舟 土 | 〔音吉〕 | 降 参 |
| | 原 (塩谷郡) | 〔清左衛門〕 | 打毀し |
| | 石末村 (塩谷郡) | 〔清左衛門〕 | 打毀し |
| 4月10日 | 氏家宿 (塩谷郡) | 〔湊屋兵助〕 | 打毀し |
| 4月10日 | 馬場村 (塩谷郡) | 〔たはこや十助〕 | 打毀し |
| 4月10日 | 桜野村 (塩谷郡) | 〔紙屋武平〕 | 打毀し |
| 4月10日 | 桜野村 (塩谷郡) | 〔万屋仙助〕 | 打毀し |
| 4月10日 | 桜野村 (塩谷郡) | 〔万屋金助〕 | 打毀し |

〔注〕 はば日附順に並べたが、空白は日附を確定できないことを示す。郡名を記さないも

のは芳賀郡、村のつかない地名は村内の字を示す。〔家名〕は一史料の記述にのみみられるものを示す。

〔史料〕慶応4年4月「下岡本村打壊騒動日記」、同4年4月「給部村綱川家あて世直し騒動風聞書」、同4年4月「亀山村名主日記」、同4年「打ちこわしならびに降参富家覚書」、同4年4月「上延生村御届帳控」、同4年4月「益子信将下之庄御用出手控」、以上『栃木県史・史料編』近世7（1978年）413-441ページ。芳賀町給部、綱川家文書「書簡」No. 2490。

ば打ちこわしを免れたため一覧表には出ていないが、亀山村（芳賀郡）の名主鈴木家は、慶応4年の持高57石1斗、他に質地高59石8斗（8町1反）、この質地金95両余、他に質物預り約110両という豪農である²⁴⁾。また祖母井村は芳賀郡北方の小在郷町で、商家が多少集中しており、打ちこわしの対象となった家も多く、そのなかに屋号をもつものが見受けられる。

芳賀郡・塩谷郡の境界付近で増加した「降参」の条件は、一揆勢やその頭取に対して質地・質物の無償返還や貸付金の帳消しか半減の他、金穀の抛出を誓約することである。たとえば迎戸の阿久津半之助と日野屋（近江商人か）、西根の宇津権右衛門（救命丸本舗）と辰巳屋はそれぞれ合せて金1,000両・米1,000俵、般若塚の黒崎治部右衛門と天満屋は合せて金700両・米500俵と多額の抛出を誓約している。給部村の綱川家、梶内の螺良家、日下田の黒崎家はそれぞれ金100両・米100俵、中柏崎村の矢口家は金200両・米200俵の抛出を誓約している²⁵⁾。しかし、まもなく黒羽藩や大田原藩がこの地方に出兵して一揆勢を鎮圧したため、上記の金穀抛出の誓約書はすべて空手形になってしまった。

ところで一覧表のおわりにかかげたように、10日夜明けに塩谷郡氏家宿と隣接の馬場・桜野村で5軒の商人が打ちこわされている²⁶⁾。前節でみたように、宇都宮周辺の世直し一揆では、宇都宮城下での同藩兵との衝突のあと、一揆勢は北上して奥州街道白沢宿を打ちこわし、一部は鬼怒川をこえて氏家宿へ向ったが、これは4日頃で、まもなく宇都宮藩兵の追撃にあつて四散している。従

24) 前掲秋本典夫著書、317-334ページ。

25) 「打ちこわしならびに降参富家覚書」（前掲『栃木県史・史料編』近世7、424-425ページ）。

26) 芳賀町給部、綱川家文書「書簡」No. 2490。

って前述の10日の打ちこわしは、芳賀郡を北上してきた一揆勢が、黒羽藩兵に追われて奥州街道にまで進出したものと考えられるが、今のところ他の史料による裏付けを得ていない。

真岡・芳賀地方の世直し一揆は、4月9日に真岡に進駐した官軍と、8日に黒羽を出発して益子周辺の分領（下之庄）警備のために南下してきた黒羽藩兵等によって鎮圧されている。ここでは黒羽藩家老益子信将の「下之庄御用出手控」に基づいて注目すべき点を指摘しておこう²⁷⁾。

第一に4月8日以降も芳賀郡各地に農民の屯集が続いている。8日一橋領下金井村（塩谷郡）辺に300人程が屯集し、さらに結城藩領高根沢郷泉村で3～400人が八兵衛家を打ちこわしている。10日真岡代官所領高岡村（真岡の東南）で農民が集会し、黒羽藩兵の出動で鉄砲1挺、ガンドウ提燈3個を残して四散し、4～9人が逮捕される。12日市塙村（益子の北方）の鎮守の森に農民が100人程集合し、さらに人数が増すところを、黒羽藩兵より早く大田原藩兵が出動して解散させる。16日夜下大羽村（益子の西方）で農民集会、黒羽藩兵が出動して解散させる。要するに4月7～8日に一応終息した筈の世直し一揆の動きは、必ずしも鎮火したわけではなく、農民たちは官軍や黒羽・大田原両藩兵の出動のすきをねらって集会を行ない、近辺の村々を動揺させていたのである。もっとも日を追って整備されてくる鎮圧体制に農民たちは抗しえず、8日を限りに打ちこわしは姿を消している。

第二に黒羽藩兵の益子陣屋への出動の目的は、同藩の分領下之庄7カ村へ周辺の他領の世直し一揆が波及することを阻止することであった。しかし、出動後間もなく、代官が逃亡した真岡代官所領の高岡・青谷両村役人から黒羽藩兵の出動を要請されている。黒羽藩兵のこうした他領の農民屯集への鎮圧出動は、11日真岡陣屋で官軍の主脳から激励されている。14日までに黒羽藩兵に寄せられた村役人よりの出動依頼は19カ村に達している。その内訳は宇都宮藩領1、真岡代官所領5、相給旗本領1、旗本領（5知行所）12となってい

27) 前掲『栃木県史・史料編』近世7、432-441ページ。なお前掲拙稿論文、185-194ページ参照。

て、真岡代官所領と旗本領が多く、これらの村々はこの時点で無警備状態にあったことが如実に示されている。

第三に黒羽藩兵の出動が当地方の世直し一揆の終息に果した役割の大きさである。同藩兵が17日に集約した「御陣屋最寄打毀家数調」によると、5~7日に8カ村にわたって20軒が打ちこわされたとされる。その他、質屋・酒屋・穀屋・醬油屋等の富家が、村役人の立会で一揆勢に誓約書を提出して打ちこわしを免れたが、その条件は諸物品の5割値下げ、質物の無条件返還、貸金の無利息5カ年賦等と、金100~500両・米100~500俵の抛出であったとしている。もっとも黒羽藩兵や大田原藩兵の出動により世直し一揆は鎮圧され、実際に米金が富家より一揆勢や農民に引渡された風聞はないとしている。

この点は4月10日付給部村綱川家宛書簡に「其節之計策ニて、百両・百俵居村へ差出候事ニ申触候得共、右は黒羽・大田原より之御沙汰ニは差出ニ不及、右催促等申者は頭取ニ付、可打取様御沙汰之趣ニ付、御安心可被下候」とあるのと合致している²⁸⁾。実際当地方の世直し一揆鎮圧のきめ手は、金穀抛出の誓約書を所持している者こそ一揆の頭取とみなして追及する黒羽・大田原藩兵の強硬な態度であったといえよう。

第4節 鹿沼周辺の世直し一揆と村方騒動

3月29日安塚村に発生した世直し一揆の中心部隊は、参加者を増大させながら宇都宮へ向ったが、一揆勢の一部は西へ進み、例幣使街道の楡木宿や鹿沼南方の村々を世直し一揆の渦中に巻込んでいる²⁹⁾。この一揆勢のコースと行動について、その全体像を把握するに至っていないが、当時の記録からいくつかの点に照明をあててみよう。

第一に3月29日に金崎宿（例幣使街道）の名主が出した廻状に、「当節安塚辺より事起り、所々打破いたし、上田村・中泉村辺迄大勢寄集り、追々当辺へ参り可申哉も難斗趣、只今亀和田村より態々注進いたし具候間」とある³⁰⁾。上

28) 前掲『栃木県史・史料編』近世7, 416-417 ページ。

29) 前掲拙稿論文, 168-173 ページ。

30) 渡辺美吉士「慶応四年の打ちこわし史料紹介」(『鹿沼史林』第19号, 1980年)。

田・中泉両村は安塚村の西隣りで、亀和田村は金崎宿の東隣りである。この中泉村は畠山木久磨領であるが、4月2日以前に村役人が小前の要求に応じて、質の利息を天保期並に引下げる、夫食不足や肥料不足の者に10月まで融通する、年季明け後の質地の田畑山林を元金10カ年賦で返地するという誓約書を出している³¹⁾。

第二に鹿沼南方の世直し一揆が本格化するのは4月4日からである。同日一揆の発起者たちは次のような廻状を上・下奈良部村、上・中・下石川村、上・下欠下村、深津村、鷺ノ谷村、茂呂村、靱山村、日光奈良部村に出している。廻状の内容は「然は今度困窮者為助成、世直し相初メ候ニ付、村々御人数、此廻状相届次第早々御出被下候様、塩山村大石坊ニてせいそろひ仕候間、右様御承知可被下候」というもので³²⁾、廻状と同時に一揆に参加しない村には数百人で押しかけて放火するという話が伝えられ、動揺した農民たちは続々と大石坊に集り、村役人も手の下しようがなかったという。なお大石坊は塩山村（例幣使街道奈原宿の西隣り）の大師ヶ窪にある寺である。このように一揆勢は次々と寺院を集結地に利用している。

第三に一揆勢が大石坊に結集して以後の動きをみておこう。「鹿沼町福田家風聞異説日記」には、「五日朝ニは下方上殿村光明寺へ屯致候由、凡八百余人、夫より大しやくほ（注一大師ヶ窪）集、油田村二股嘉七と申大家打毀し、夫栗野村横尾申大家参ル、質物借金証文不残差出し候ニ付、夫ニて事済、粕尾村越候よし、夫より中頭取横尾引返し、金策致候よしニ付、惣勢怒り頭取ヲ相取候よし、右ニて大散仕候よし」とある³³⁾。また「下南摩村名主見習臨時御用留控帳」には、「四月五日、暁七ツ時百姓老騎（揆）相起り、大師ヶ窪ニ屯ニ相成、夫より西沢勝願寺へ参り、夫より弥五左衛門より油田二又へ行打こわし、夫より半田医王寺へ行泊り、夫より暁七ツ時深程へ行、夫より久野・栗野・粕尾、大越路極楽寺ニて頭取笹川数馬・鈴木直弥兩人打ころし、村々へ思ひ思ひニ引取申候」とある³⁴⁾。一揆勢が大芦川と小倉川に挟まれた地域を巡回して参加者

31) 「畠山領訴状留」（前掲『栃木県史・史料編』近世7、358ページ）。

32) 「茂呂村佐藤家御用留」（同上書、323ページ）。

33) 同上書、325ページ。

34) 同上書、333-334ページ。

を増加させつつ、村役人や豪農を威圧している様子がうかがえる。結局打ちこわされたのは油田村の二又嘉七という富家のみで、西沢村の弥五左衛門と口栗野村の横尾家は一揆勢に降参している。なお口栗野村は小倉川の溪口集落として町場化しており、横尾家はそこの有力商人であった。

第四に一揆勢の頭取についてみてみよう。ここでは他の地域の世直し一揆とは異なり、頭取の名前やスタイル、行動などがかなり明確な点に特徴がある。

「茂呂村佐藤家御用留」には、「半田村迄罷出様子伺候所、頭取之義は、博徒打之体、一刀ヲ帶、晒し切ニて鉢卷いたし、拔身・鎧を携ひ、吾人は楡木宿観音寺住僧之由、都合五六人と身受ケ、何分不正ケ間敷心付」と興味深い観察が記されている³⁵⁾。後述の佐目村・大和田村の村役人が一揆勢に提出した誓約書は、頭取の笹川数馬・鈴木直児（司）あてになっている。他の史料「西方騒事見テ写置」では「栃木荒茂美二男、ふつこふし頭取ニ而」とし、他の一人を「十三」としている³⁶⁾。熊田一氏が『楡木物語』（下野史談会、1942年）に基づいて、頭取は栃木町の新榎^{あらもみ}という浪人者で、その父親が畠山木久麿陣屋役所（栃木町隣接の嘉右衛門新田にあった）の代官新榎沢右衛門であろうと推測している点に符合している³⁷⁾。

ところで口栗野村の横尾家が降参した後、頭取の一人が同宅へ戻って私的な金策をしたことが露頭して、一揆勢の怒りを買っている。この時は南摩村の寺院が仲に入って収まったが、一揆勢が山間の粕尾村に着いたところで、頭取兩人は楡木勢・塩山勢によって殺され、一揆勢はここで解散した³⁸⁾。頭取の二人が殺された理由は、攻撃対象の豪農から私的に金を引出すような不正に、一揆に参加している農民大衆が憤激したことが主因とみられる。しかし、一揆勢のなかには、動静をさぐるために村役人やその息のかかった者がかなりまぎれ込んでおり、一揆の早期の鎮静をはかるために、彼等が策動したことも考えられる。

35) 同上書、324 ページ。

36) 渡辺美吉士「慶応四年西方地方の打ちこわし」(『鹿沼史林』第21号、1982年)。

37) 熊田一「慶応四年の農民騒動」(大町雅美・長谷川伸三編著『幕末の農民一揆』所収、雄山閣、1974年)。

38) 「茂呂村佐藤家御用留」(前掲『栃木県史・史料編』近世7、324 ページ)。

第五に一揆勢に降参した村々が提出した誓約書についてみてみよう。畠山木久磨領では、中泉村が4月2日以前に村方小前あてに提出したことは先に述べたが、4月4日に佐目村が、4月5日に大和田村等東最寄九カ村が、一揆の頭取と目される笹川数馬・鈴木直児（司）あてに提出している。その内容は一揆の高揚を反映してか、村役人や豪農にとってしだいにきびしいものになっている。佐目村の場合は、①質地は10カ年季とし、質入主が手作りし、年貢諸役も質入主が負担する、10カ年たてば元金有合次第に返地する、②肥金に困窮する者と窮民の夫食は有徳の者が貸付けを配慮するという内容で、質物・質利息等については、村に質屋渡世の者がいないため特に規定していない。大和田村等九カ村の場合は、①質地証文は10カ年賦で返す、②質物のうち夏入用の品はすぐに返すが、金物は10月に元金にて返す、③質利息は金1両に付100文とする、④肥金に差支える者へは当秋まで金を貸す、⑤穀物に困窮する者へは10月まで貸付けるという内容で、「若此義相背候もの有之候ハム、直様打こわし候事、右承知之上ハ旗印相立(定か)可申事」と誓約している³⁹⁾。

大和田村は榎木宿の東側に位置し、上記の誓約書について、領主へは「当今世直と唱ひ、村々一円誘引被致、無余義書類差出申候」と届け出ている。しかし、大和田村はこの地域の世直し一揆が鎮静した直後、隣村の旗本宮城氏の知行所植野村の農民から世直しの実施を要求され、困惑している。植野村の村役人は、4月5日に大和田村の村役人が質物と質地証文の返還等を一揆勢に約束した通りに、まず質物を元利金を一切差出さずに返還することを要求し、受入れさせている。ついで植野村の村役人は同様に質地証文の無償返還を要求してきたので、困惑した大和田村の村役人は、4月14日頃自分の領主と相手方の領主に実情を訴えている。これに応じて畠山木久磨の家来は宮城氏の家来に交渉し、農民に質地証文の無償返還要求を引込めさせるように働きかけている⁴⁰⁾。事態の結末は不明だが、農民への支配力が急速に低下していた当時の旗本領主が、支障なく農民を規制できたか疑わしいものである。

39)「畠山領訴状留」(同上書、358-359、362-363ページ)。

40)「畠山領訴状留」(同上書、362-364ページ)。

鹿沼周辺の村々では、世直し一揆の鎮静後間もなく、中下層農民が質物・質地の返還や金穀の抛出を村役人や上層農民に要求する世直しの性格の濃い村方騒動を展開している。上記の植野村の場合も、具体的な状況は不明であるが、小前層が村役人を突上げて大和田村に交渉させていたものと思われる。鹿沼宿の西北郊下沢村（旗本四給）や同西南郊下南摩村（畠山木久磨知行所）の事例については前稿等にゆずり⁴¹⁾、ここでは同じ畠山領の野沢村についてみてみよう。

鹿沼の南方約2里、例幣使街道に沿った野沢村では、3月末以来近辺の世直し一揆を背後に、村内の小前が集会を続け、酒食を浪費したあげく、その費用の負担を村役人や豪農に要求している。村役人がやむなく承知すると散会したが、4月6日よりふたたび鎮守の森に集り氣勢をあげ、豪農とみなした者へ窮民救済を名目にかなりの金穀の差出しを要求している。たとえば上層農民の嘉重は金25両・米25俵を要求され、3俵程を差出すことを承知したところ、小前たちは同人宅へ押寄せ、放火か打ちこわしを辞さない態度を示したので、嘉重はやむなく金10両・米10俵の差出しを約束して、小前たちを引取らせている。小前の集会は11日まで続き、この間に多分の酒食を浪費し、村役人や豪農に抛出させた米金をそれにあて、残りも持高によらずに均等に分配している。

豪農と村役人はようやく5月21日に右の事情を領主に訴え、陣屋役人による取調べの結果、百姓茂市が主謀者とみなされ入牢させられている。同月晦日には茂市は村預けを命じられ、また豪農より小前へ抛出した金7両・米20俵は窮民の救済が目的なので、ほぼ生活が成立つ者は分配された米金を返し、窮民のみに再分配するように命じられている⁴²⁾。以上が野沢村の村方騒動の顛末であるが、同様の騒動は当時多くの村々で発生していたものと思われる。

例幣使街道金崎宿とその西方に点在する13カ村は西方郷内とよばれ、その大部分は現在の上都賀郡西方村に属するが、この地域に4月10日から世直し

41) 前掲拙稿論文、172ページ、前掲熊田一「慶応四年の農民騒動」215-251ページ。

42) 「畠山領訴状留」（前掲『栃木県史・史料編』近世7、370-373ページ）。

一揆が起っている。10日夜から11日朝にかけて、西方郷内の農民が富士浅間山（西方山）に結集し、同日昼頃金崎宿木之宮の名主重右衛門宅に押しかけ、居宅・土蔵等を打ちこわしている。重右衛門宅が攻撃されたのは、安塚村に発した一揆勢が西方郷内を含む鹿沼南方に向った緊迫した情勢のなかで、4月2日郷内村々の役人と豪農が集まり、合計250両を抛金して郷内貧民への救済資金として準備したが、一揆が一応鎮静した7日の村役人の集会で、この積金の郷内困窮者への配分方法が決りかけた際に、重右衛門が積金の配分は「五拾兩テよろしかるふ、其内ニ而役人呑食いの分ヲ引割遣よかるふ」と話したことが郷内の農民に伝わり、彼等の憤激をかったためという。

重右衛門宅の打ちこわしに驚いた古宿村の名主三沢作兵衛は、隣接する壬生藩に鎮圧を要請したところ、同藩の小笠原甚三郎が銃砲隊を引連れて磯村（榆木宿と金崎宿の間）より出動し、金崎宿より引揚げてきた農民に発砲したが、西方郷内6カ村を知行地とする旗本横山氏の地代官石川氏が古宿陣屋より駆けつけ、百姓を打殺されるのは迷惑と抗議したので、壬生藩兵は発砲を中止して引揚げていった。一方硬化した農民たちに対して、仲裁に入った4カ寺の説得も効果をあげえず、旗本横山氏領の村役人たちが、農民側の要求を生かした打開策を講じるから、道具を持ったままで帰村し待機するように説得し、農民たちを解散させている。

4月15日に郷内の農民代表と村役人たちが峯村福正寺に集まり、次の条件で内済することになった。まず7カ年以内の借用証文は5カ年賦、4～15両の質物は元金の3割で返還、15両以上の質物は元金の半額で返還、返された元金は郷内窮民の救済資金とする、村内ごとに富家が窮民へ穀物を来る8月まで貸付ける、こやし代金は25両に1分の利息で8月限りで元利返済、その他酒・醬油・水油・白米の値段を引下げるという、農民側の要求を相当もりこんだ条件になっている。この日以後、各村ごとに抛出された金穀が、村役人の手で村内の生活困窮者に配分されている。対象となる窮民の家数は金崎宿39軒、他12カ村で216軒に達している⁴³⁾。以後も村役人・豪農と小前農民たちの間には緊張

43) 前掲渡辺美吉士「慶応四年の打ちこわし史料紹介」・「慶応四年西方地方の打ちこわし」。

した関係が続いているが、言及することを割愛したい。

ところで明治維新政府の地方支配体制が確立してくると、世直し一揆の成果を否定する反動攻勢が表面化してくる。明治元年（1868）冬この地域の質屋渡世の者が連名で日光県知事鍋島道太郎に、春の世直し一揆中に返還した質物を取戻すことを願い出ている。鍋島は質物を12月朔日までに取返すように命じたが、自主的に質物を質屋に戻しにくる者はいなかった。そこで鍋島は重ねて質物を質屋に戻すことを命じ、自ら視察をかねて農村部に出張し、質物を残らず返させたという。こうして「右借シ金質物前々之通相成申候、依之ふつこふし之事皆不用之事候」という事態になった⁴⁴⁾。しかし、世直し一揆のもう一つの成果である金穀の抛出や物価・利息の引下げまで、元に戻されたわけではなかった。

第5節 多功宿の騒動と下津原村の世直し一揆

慶応4年4月前後の野州では、上述の宇都宮・鹿沼周辺、真岡・芳賀地方の世直し一揆とはやや別個に、いくつかの世直しの性格の濃い一揆・打ちこわし・村方騒動が発生している。そうした事例のうち、3月28日以降激化する河内郡上三川^{かみのかわ}地方（三村名主兵助等と坂上村・三王山村農民との紛争）や4月上旬の芳賀郡谷田貝町の騒動については前稿で述べた⁴⁵⁾。これらの事件は他地域の世直し一揆の影響が強いとはいえ、一応独立して発生し、やがて終息しているが、その情報は発生直後に野州の他の地域に伝わっていた。

たとえば芳賀郡「亀山村名主日記」4月2日の条に、「上三川辺も其最寄廿ヶ村も申合、是又物持へ掛合可有之由」とあり⁴⁶⁾、芳賀郡下高間木村役人の「野州騒乱届書控」（4月9日付）に、「野州芳賀郡久下田組と相唱へ、三拾五六ヶ村人数同所芳全寺と申寺院へ屯集致し、当五日勢揃ニて谷田貝・久下田宿へ押

44) 「西方騒事見テ写置」（前掲渡辺美吉士「慶応四年西方地方の打ちこわし」）。

45) 前掲拙稿論文、182-185ページ。前者については、上三川町史編さん委員会編『上三川町史・史料編』近世（1979年）第7章第1節4「三村・坂上・三王山村打毀一件」参照。

46) 前掲『栃木県史・史料編』近世7、419ページ。

出し、未タ何方へ乱妨致し候人数ニ御座候哉不相識、尤谷田貝町へは乱妨致し不申候趣ニて、貳百俵・貳百両も強談之上ニ奪取哉之趣ニ御座候事」とある⁴⁷⁾。いずれも参加した村数等は誇大であるが、騒動の特徴はよく伝えている。

これらの事件は一見孤立した闘いにみえるが、世直しの要求を村落や地域で実現しようとする農民の意識や行動は、他の地域と共通したものである。ここでは前稿でも取上げたが、その後知りえた史料により修正すべき点の多い下津原騒動と、今回新たに取上げる河内郡多功宿の事件を検討してみたい。

多功宿は日光街道石橋宿の東隣りで、脇街道（結城道）の宿場である。この宿は旗本4人の相給地であるが、4月初め頃農民たちが得物を持って宿内の大聖寺に集まった。驚いた宿役人が問いただしたところ、農民たちは宿持の原地の地代貯え金と伐木代金の合せて102両1分を小前に割渡すことと宿持の立木の伐取の承認を要求してきた。宿役人側がこの要求を受入れると、農民たちは今度は、①田畑山林の質を15カ年季とし、この間に元金で返すこと、②借金は新古に限らず無利息10カ年賦とすること、③入質の品物は元金で返還するか、元金ができない場合は無利息でかつ流質せずに預っておくこと、④質利息を引下げること、⑤小作山林（落葉代か）も値下げすることを要求してきた。いずれも世直し一揆的要求である。

宿役人側は小前のなかで金融を行なっている者に事情を聞いたところ、他から借入れて宿内に融通しているというので、農民たちの要求を拒否しようとした。しかし、農民側は要求が通らなければ不同意の宿役人および小前宅を打ちこわし、焼捨でするというので、宿役人側は時節柄やむをえず要求を受入れることにした。しかし、農民たちはなおも結集を続け、農作業を放置している間に、4月7日官軍（館林藩兵）が通りかかり、人馬の調達ができなかったことから宿役人より事情を聞き、官軍は大聖寺に鎮圧に入り、12名を逮捕するに至った。逮捕者の取調べにより、宿内百姓の俣熊蔵が主謀者であることが判明した。官軍は12名の者を釈放し、一方宿役人に熊蔵の逮捕と農民に対して地代金の割渡し、質利息の引下げ等を遵守することを命じて立去った。その後9日

47) 同上書、418ページ。

に、逮捕を免れた熊蔵がふたたび活動を始め、大聖寺に同志を集めたので、宿役人は熊蔵の逮捕に踏切っている⁴⁸⁾。

以上が史料からわかる事件の概要であるが、多功宿が宇都宮周辺の世直し一揆の発端ともみられる打ちこわしがあった石橋宿の隣宿であるだけに、その直接的な影響が考えられる。なお官軍は屯集していた農民12名を釈放しながら、宿役人への「申渡」のなかで、騒動を組織した熊蔵をさして「剛性之者」として追及することと、農民への譲歩条件を遵守することを宿役人に命じ、「万一官軍之勢を借り、二枚之舌ニ相成候てハ、返て役人之落度相成候間」と述べている点に注目される⁴⁹⁾。こうした官軍の態度には、3月後半に東上州で世直し一揆の鎮圧に苦勞した館林藩兵の体験が反映していると思われる。

例幣使街道の富田宿（現大平町）と犬伏宿（現佐野市）のほぼ中間にあたる都賀郡下津原村（現岩船町）の世直し一揆は4月13日に発生している。この事件の経過を、同村で酒造・醤油造・質屋を営む藤沢家の「家史稿本」によって略述してみよう⁵⁰⁾。

4月12日夜一揆勢（暴党）は赤塚山に集合し、翌未明「世直シ大明神」と記した紙旗を押立て、近辺の各村より各戸1人ずつを強制的に動員し、食事の焚出しを拒否した茂呂村名主小林弥一郎家を打ちこわした。藤沢家は一揆勢の要求に応じて借金証文と質物を無償で返還することを承諾し、書面を渡したので打ちこわしを免れた。夜になり一揆勢は佐野町を襲う氣勢を示して駒場村恵性院の境内に屯集したところ、彦根藩（佐野陣屋）と堀田藩（植野陣屋）の出動にあい鎮圧された。一揆勢は四散し、その巨魁（頭取）は謀者によって斬殺された。しかし、藤沢家では一揆勢との約束をまもって、6月15日を期限として質物を半金無利息で返還した。

ところで藤沢家が一揆勢に差出した書面の実物と思われるものが、現在同家に保存されている。内容は「此度世直しニ付、貸金と其外質物ニ至迄、不殘相返シ可申候、但シ此度之儀ニ付、違返等無之候処、右之趣致承知、此外村内穀

48) 掲掲『上三川町史・史料編』近世、第7章第1節3「多功宿小前大聖寺屯集一件」。

49) 「多功宿役人への官軍申渡」（同上書、457-458ページ）。

50) 深谷克己・河内八郎「慶応4年『世直し』史料」（『栃木県史研究』第3号、1972年）。

物何程成共可差上候」という「覚」で、4月13日付、下津原村西沢藤左衛門より世直し大明神様あてになっている⁵¹⁾。しかもこの書面には、折畳んだところが刀様のもので切りかけた破れ目と血痕らしい汚染がある。これは彦根藩兵等が一揆勢を鎮圧した際に、一揆勢のなかでにわかに巨魁を斬りつけた者がおり、彼が書面を奪い取る際についたものといわれ、おそらく藤沢家に代償めあてに戻されたものとみられる⁵²⁾。また藤沢家は「家史稿本」で述べてあるように、進んで質物の返還を行なったのではなかった。一揆勢の四散後間もなく、次のような札が藤沢家に張られたのである⁵³⁾。

覚

四番

先達テ人誠来り、大勢之者引連かけ相之上、光（降）さん書差出シ、人々正智（承知）いたし候、其末した弐字ニ相違（違）うニついてハ、今一度人誠をとどろかす事

此書隠置有之候者ハ黒土也、こうかいハ先ニ立ゝす

色々弐字ヲ兼者火払事

稚拙な表現であるが、世直し大明神ないしは世直し要求を「人誠」と表現し、藤沢家が一揆勢の要求を受入れて降参書を差出し、打ちこわしを免れた以上、それに違背した場合は再度押しかけて世直しを要求すると脅かしているのである。「弐字」が何をさすのかは必ずしも明確ではないが、降参の条件を示していると思われる。付記の「黒土也」とは焼払うという意味であろう。さらに先の一揆に参加した4カ村の農民に再度の決起をうながし、豪農への協力を警告する張札も出されている⁵⁴⁾。

こうした一揆勢の残留分子による脅迫に押されて、藤沢家はやむなく質物の返還を履行したのである。なお同家は同年4月付「非常ニ付質物左之通」という質物取扱い方約定書を残しているが⁵⁵⁾、これは一揆勢の要求をいれて質物の返還を開始する際に、履行の条件を具体的に取決めて店に掲示した文言と思わ

51) 前掲『栃木県史・史料編』近世7, 345 ページ。西沢は藤沢家の屋号である。なおこの書面の写真は同上書口絵第3図。

52) 岩舟町教育委員会編『岩舟町の歴史』（1974年）260-264 ページ参照。

53), 54) 「藤沢家への張札」2点（前掲『栃木県史・史料編』近世7, 346 ページ）。

55) 同上書, 345-346 ページ。

れる。この内容の特徴は、①去卯（慶応3年）2月より当4月までの分は無利息、元金返し。②去卯2月以前の質物は流質の筈だが、質物が残っている場合は元金と去卯2月以前の利息のみで返還する。③只木・太田・羽萩の3カ村（いずれも下津原村の南方近村）には、去卯2月より当4月まで無利息、元金は半額で6月15日まで質物を返還するが、以後は延質以外は一切の入質をとわる。④村方・他村を限らず、内々で元金の半額を渡し、村方を通じて質物の返還を求められてもことわる。要するに無利息・半金返しという質入側にきわめて有利な条件を、一揆に参加した村々に限定して適用することを明示しており、前述の張札とあわせてみると、豪農と農民との緊張した関係の継続を思い知らされるものである。

以上のような下津原村周辺の事件は、鹿沼周辺および西方地方の騒動が4月10日頃より激化し、世直しの要求を村落内に深めようとする傾向と一致する点が多い。また佐野方面へ波及する可能性があり、それゆえに領主側の鎮圧も早かった点が注目される。さらに「世直し大明神」の出現は、野州では今のところこの一例のみが明らかにされているが、東上州世直し一揆の影響とみることができる。

む す び

以上5節にわたる検討は、結局野州の世直し一揆とそれに関連した村方騒動の事実経過を整理したものにはすぎない。野州世直し一揆の普遍的な性格と特殊性、さらに野州内での地域的特質の異同等を、幕末・維新时期の社会・経済構造との関連で検討することには、ほとんど入れなかった。

たとえば鹿沼周辺の世直し一揆の展開過程は、必ずしも打ちこわしを自己目的とせず、村落・組合村単位での質地・質物の返還や物価引下げ、窮民の救済等の実質的な成果を獲得する方向へ進んでおり、これは麻・かんびょう・薪炭等の商品生産が比較的展開している経済構造と関連させて把握する必要がある。これに対して、真岡・芳賀地方のように、当初打ちこわしを至上命令とするかのような激しい行動で広大な地域を席卷し、後半では金穀の抛出を

最大の要求として豪農商の降参をかちとる戦術を展開しながら、世直しの村落での深化をはからなかったために、領主権力側の軍事・警察的行動で獲得した成果が空手形になってしまう過程は、自給的主穀生産を脱しきれず、村落内に隷属農民が残存しているような社会・経済構造と密接にかかわっていると思われる。

次にみのがしえないのは、野州の世直し一揆が、戊辰戦争の戦雲にやや先行して展開し、戊辰戦争の波及のなかで挫折していくことである。本稿ではこの点もほとんど検討することができなかったが、一揆・打ちこわしに踏切った農民大衆と過渡期の領主権力との関連を的確に検討する必要がある。たとえば世直し一揆自体は、野州のどの地域でも4月10日前後に終息してしまい、4月19日の旧幕府軍による宇都宮城攻略、同22日の安塚戦争、同23日の官軍による宇都宮城奪回という激戦下で農民の闘争は挫折し、あるいは村落や組合村の範囲内に沈潜していく。このような事態をもたらしたのは、官軍＝維新政府が農民の反乱をいわば獅子身中の虫とみなして、内乱の激化のなかでいちはやく世直し一揆鎮圧体制をしき、野州の各藩を従来の支配領域をこえて活動させたことによると思われる。

さらに慶応4年の世直し一揆の特質を明らかにするためには、天保期、安政開港以後、慶応期、さらに明治初年の当地方の農民闘争の動向と関連させて検討する必要が痛感される。この点に関しては、「はじめに」で触れたように、前稿への批判のなかで指摘されていることでもあり、「世直し状況論」を批判的に受けとめることと、幕末・維新时期の経済段階および階級関係の変化と関連させてとらえることが不可欠であろう。

以上の諸点については、本稿の作成過程でたえず気にかかった点ではあるが、時間と紙面の制約により、ほとんど踏込むことができなかった。今後の課題として、本稿の整理を一つの基礎作業としつつ、次の機会に期したいと思っている。

〔付記〕本稿作成に際して、史料・文献の閲覧に御高配頂いた栃木県史編さん室および栃木県立図書館に深く感謝いたします。